法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-14

<資料紹介>英国におけるオーラルヒストリー(4) : Centre for the Study of the Production of the Built Environment の活動

UMEZAKI, Osamu / 梅崎, 修

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン : 法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies
(巻 / Volume)
13
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
103
(終了ページ / End Page)
109
(発行年 / Year)
2016-03

〈資料紹介〉

英国におけるオーラルヒストリー(4)
―Centre for the Study of the Production of the Built Environment の活動

法政大学キャリアデザイン学部教授　梅崎　修

1．はじめに

本稿は、英国における労働史オーラルヒストリー・アーカイブについて紹介する。既に梅崎（2014）では、英国におけるフリーランスのオーラルヒストリアンたちの活動を、梅崎（2015a）では、ロンドン博物館（Museum of London）や大英図書館（British Library）の活動を、梅崎（2015b）では、London Metropolitan University の図書館に設置されている TUC Library の Britain at Work：Voices from the Workplace 1945-1995を紹介した。これらの報告は、2013年4月より2014年3月まで大学の在外研究制度を利用して英国ロンドンに滞在中、さらにその後、2015年3月に再訪問した際に大学や博物館などを訪問し、研究者、アーキビスト、およびフリーランスのオーラルヒストリアンへのインタビューを行った成果である。

英国におけるオーラルヒストリーの視察報告を続けている理由は、上記の先行文献でも述べてきたが、本稿から読み始める人がほとんどだと思うので、繰り返し述べておく。

英国は米国と並んでオーラルヒストリーの先進地域である。数回の調査報告だけで英国における多様なオーラルヒストリーの研究や活動を紹介することはできない。研究の紹介に関しては、トンプソンの主著『記憶から歴史へ－オーラルヒストリーの世界』（Thompson, 2000）が翻訳され、酒井（2008）のような日本語テキストも刊行されて日本の研究者にもその全体像が明らかになってきた。しかし、大学や博物館などのオーラルヒストリーの収集・整理・展示については十分に紹介されているとは言い難い。海外のオーラルヒストリーの紹介に関しては、私が研究仲間の田口和雄氏と行った、米国におけるオーラルヒストリー・センターの紹介がある（梅崎・田口（2012, 2013, 2014）、田口・梅崎（2012, 2013a, 2013b, 2014））。しかし、英国に関しては情報が少ないと言えよう。本報告は、日本においてオーラルヒストリーに取り組む人々、特に労働史研究に関心を持つ人々にとって高い情報価値があると考える。

なお、梅崎（2014, 2015ab）でも指摘したように、ここ10年の間、日本においても様々な学問分野でオーラルヒストリーという研究手法が広がってきた。ところが、日本のオーラルヒストリー・プロジェクトは、未だに個人レベルやチーム・レベルの取り組みに止まっているとも言える。特にオーラルヒストリーのアーカイブ化に関しては、その重要性が指摘されつつも実行するのは難しい[1)]。将来、日本においてオーラルヒストリーの収集・整理・展示が進展しなければ、オーラルヒストリーという調査が世代を超えて引き継がれることはない。言い換えれば、オーラルヒストリー

のアーカイブがあれば、調査と研究は地域や世代を超えてオーラルヒストリーの利用者に広がっていくと言えよう。

私は、2015年7月1日にWestminster Business School（WBS）とUniversity of Westminsterの School of Architecture and the Built Environment（SABE）の共同プロジェクトである、Centre for the Study of the Production of the Built Environment（ProBE）を訪問し、代表のLinda Clarke氏（WBS教授）にインタビューを行った。彼女は、WBSのヨーロッパ労使関係部門の学術スタッフであり、ProBEの代表者である。本稿では、ProBEが調査を続けている建設労働者の労働史オーラルヒストリー・プロジェクトを紹介する。労働史オーラルヒストリーは、日本でも調査蓄積があり、方法論に関しても学会で議論されている（詳しくは梅崎（2007, 2012, 2016）参照）。しかし、労働史オーラルヒストリー・アーカイブは十分に進んでいない。それゆえ、ProBEのプロジェクトは、我々労働史研究者にとって将来の目標になると言える。

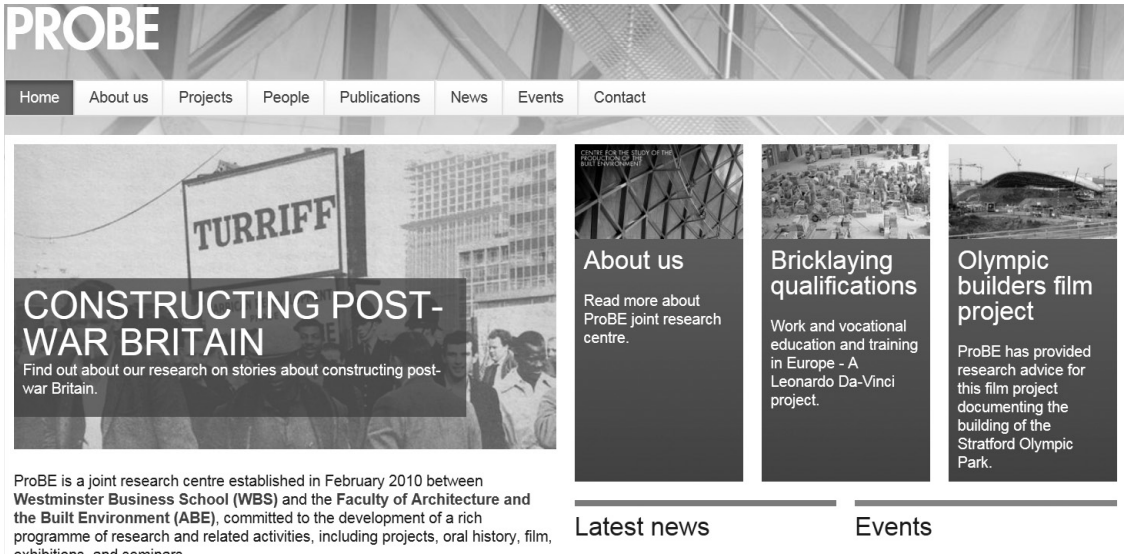
2 Centre for the Study of the Production of the Built Environment（ProBE）の概要

ProBEは、建築と都市計画を教える学部とビジネススクールが2010年に設立した研究センターである（図1参照）。WBSとSABEは、University of Westminsterに複数あるキャンパスの中でもロンドン中心部にある同じ校舎の中に設置されている。建築系の研究者とビジネススクールの研究者が近くにいることで、領域横断的な建築労働史や建設労働調査が可能になったと言える。

ProBEは、調査研究、セミナーやシンポジウムの開催、および映像公開などを行っている。このセンターの主な研究プロジェクトは、以下の5つである。

(1) Implementation of the European Qualifications Framework, with special reference to construction
(2) Oral Labour History

図1　ProBEのWebサイト（一部）



（資料）ProBEのwebサイト（一部）

(3) Labour in the construction industry
(4) SCIBE: Scarcity and Creativity in the Built Environment
(5) Low Energy Construction

ビジネススクールが拠点の調査プロジェクトの一つの柱としてオーラルヒストリーが挙げられているのは珍しいと言えよう。Linda Clarke 氏は、「自分の専門は労働史であるが、ビジネススクールに所属しているので、労働史だけを教えたり、研究したりすることは難しい」と言う。実際に彼女は、授業では International HRM や International Employment Relations を担当している。言い換えれば、なかなかのやり手である彼女は、学内外において学際の場を創り、ホームページなどを使った研究成果を発信し続けることで、同時にオーラルヒストリーの場も創ったと言えよう。

なお、意外に思われるかもしれないが、建築分野ではオーラルヒストリーは有力な手法である。なぜならば、経年によって作品がなくなってしまう可能性が高いからである。例えば米国では、シカゴ美術館が行っている Chicago Architects Oral History Project がある。また、筆者も日本を代表する建築家の清家清氏のオーラルヒストリーを行った経験がある[2)]。

また ProBE は、国際的かつ学際的なネットワークを構築している。例えば、各国で開催されたオリンピックを調査対象とし、公共事業が生んだ建設と建設労働者を国際比較する研究プロジェクトなどもある。特に労働史・オーラルヒストリーに関しては、梅崎（2015）で紹介した Britain at Work 1945-1990 との協力関係を構築している。

3．ProBE のオーラルヒストリー

続けて本節では、ProBE のオーラルヒストリー・プロジェクトを紹介したい。このオーラルヒストリー・プロジェクトは、センター開設当初から続けられている。ProBE の web サイトによれば、オーラルヒストリーという手法は、個々人の認識や近年の歴史の流れを理解するために役立つと考えられている。公的な資料も活き活きとした歴史把握を与えてくれるが、オーラルヒストリーは、当時の人々が実際に考えていたことについてより深い理解を与えてくれると説明されている。なお、ProBE の web サイトの中で多くの音声資料の抜粋文を読むことができる。また申し込めば、センター内の資料室で全音声を聞くことが可能である。

オーラルヒストリー・プロジェクトとしては、Constructing post-war Britain: building workers' stories 1950-70 が代表的なものである。Leverhulme Trust fund の助成による 2 年のプロジェクトであり、Linda Clarke 氏と一緒に Christine Wal 氏が中心となって始めたプロジェクトである。リサーチフェローとして Charles McGuire 氏や Olivia Muñoz-Rojas 氏も参加していた。

このプロジェクトでは、戦後英国の建設・土木の現場で働いた約 50 人以上の建設労働者たちの記憶や物語を収集し、建設労働オーラルヒストリーの持続的なアーカイブの構築を目指している。これらの資料は、研究やドキュメンタリーの証拠として役立つだけでなく、戦後英国の建設・土木産業における社会的関係の変化を把握し、その意義を検討するためにも役立つ。

なお、このコレクションは、それぞれ建造物や都市計画別に以下のような小プロジェクトに分けられている。民間の建設事業、原子力発電所のような国有企業、道路などの公共財、都市開発など幅広い建設・土木が調査対象となっている。

Barbican development
M1 motorway
Sizewell A Nuclear Power Station
The South Bank Arts Centre
Stevenage New Town

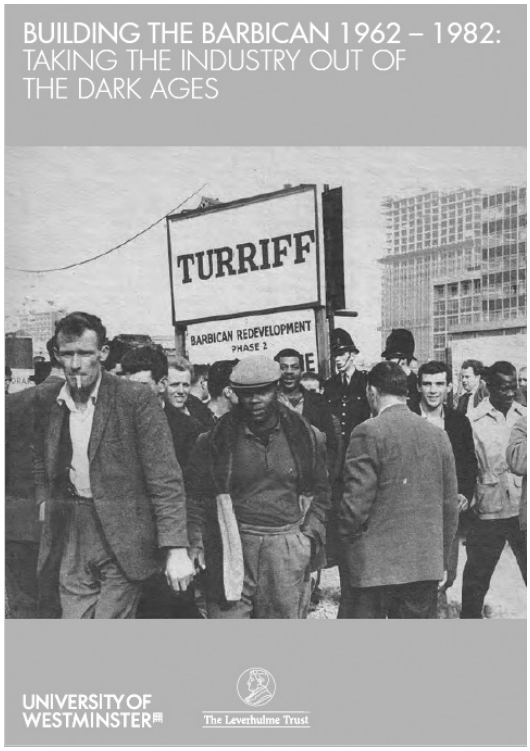
加えて、それぞれの小プロジェクトごとに、5 つの冊子を刊行している。図 2 に示したのは、

Barbican development の冊子である。この冊子は、web サイトからもダウンロード可能であり、オーラルヒストリーだけでなく、文書資料や写真などによって作成されているので、とても読み易い冊子である。

さらに、このプロジェクトの資料は、以下のようなテーマ別に資料が再整理されており、web サイト上で資料を探し、部分的にはオーラルヒストリーを視聴することも可能である（図 3）。

Health and safety
Industrial relations
Role of Irish workers
Labour only-subcontracting
New materials and technologies
Training
Wages & bonus
Blacklisting

図 2　Barbican development の冊子



（資料）ProBE の web サイト

Role of the communist party

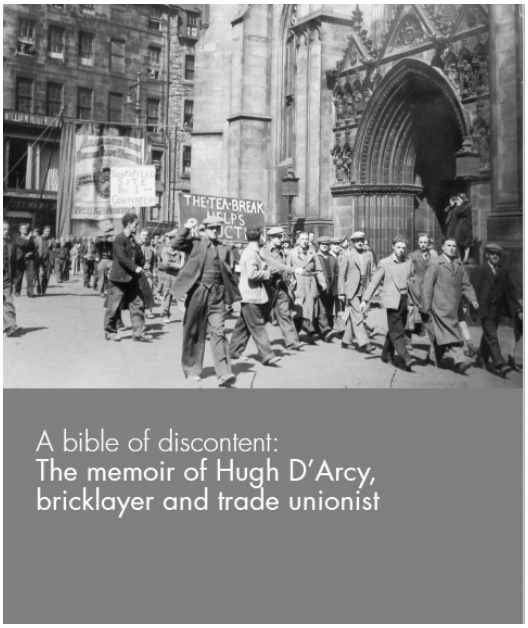
このコレクションの中の労働者たちのオーラルヒストリーは、建設業という厳しい労働環境下の仕事経験について価値ある記録であり、戦後労働史に多くの分析視角と新しい洞察をもたらすと考えられている。彼らの歴史証言は、当時の建設方法や技術、職種別組合、職業訓練、賃金、雇用システムなどを説明してくれる。

なお、以上の 5つのプロジェクトに加えて、新しい 6冊目の冊子として、A bible of discontent: The memoir of Hugh D'Arcy, bricklayer and trade unionist が刊行された（図 4参照）。この資

図 3　視聴のページ

（資料）ProBE の web サイト

図 4　A bible of discontent



（資料）ProBE の web サイト

料は、Hugh　D'Arcy 氏によって書かれ、Linda Clarke 氏や Christine Wall 氏によって編集され、プロジェクトに寄贈された。彼は、2014年1月に94歳で亡くなったが、自分自身の組合活動経験と英国労働組合運動に対する意見を述べている。

4．ネットワーク力・発信力の勝利

本稿では、ProBE の活動を紹介し、このセンターが実施しているオーラルヒストリーのプロジェクトを紹介した。オーラルヒストリー以外のプロジェクトは、本稿の目的と外れるので、その多くを説明から省いたが、どれも魅力的な調査プロジェクトであった。

このような ProBE の活発な活動は、Linda Clarke 氏の優れたリーダーシップによるところが大きい。インタビューの中で彼女は、自分の専門は労働史であるが、労働史だけで大学内に研究拠点をつくるのは難しいと言われた。彼女の授業でも、歴史研究ではなく、現状分析の講義を行っている。ビジネススクールの学生の要望を考えれば、当然のことであろう。ただし、そのような授業を行いつつ、専門を横断しながら学内に拠点をつくり、それを学内外に発信することでセンターの存在を認めさせている。彼女の語りを聞きながら、私が思ったのは、「優れた研究者であると共に、優れたプロジェクトマネージャーだ」ということである。

自らを振り返ってみれば、労働史研究者やオーラルヒストリー研究者間をネットワーク化する発想はあっても、学際的なネットワークを行う発想があったのかと問うと、「なかった」と言わざるを得ない。

Linda　Clarke 氏の取組みは、われわれ労働史の研究者にとって、とても参考になるし、勇気を与えてくれる。これまでオーラルヒストリーの拠点づくりについては、英国と米国での数々の調査を重ねてきた。米国の拠点は資金力で勝っているが、ProBE はそうとは言えない。要するに、上手くやりくりしているのである。彼女も、資金獲得に苦労しているとも発言していたが、それを跳ね返しているという自負が会話の中で感じられた。残念ながら、そのようなマネージャーとしての迫力や自信を読者に直接的に届けることは難しいが、ここにわれわれオーラルヒストリアンの理想モデルがあることを、この場にて読者へお伝えしたい。

注

1）日本における労働史オーラルヒストリー・アーカイブ化の取組みとして、私が研究仲間と共同で開設した労働史オーラルヒストリー・プロジェクトの web サイト（大阪産業労働資料館）がある。詳しくは、梅崎（2016）を参照。（http://shaunkyo.jp/oralhistory/about.html）

2）近年、建築以外にも芸術のオーラルヒストリーも盛んになってきている。例えば、「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」が web 上で公開されている。また海外の事例では、田口・梅崎（2013b）で紹介した The New York Public Library のダンスなどを中心とした芸術のオーラルヒストリーがある。

参考文献

梅崎修（2007）「労働研究とオーラルヒストリー」『大原社会問題研究雑誌』589, pp.17 ～ 32

――――（2012）「オーラルヒストリーによって何を分析するのか―労働史における＜オーラリティー＞の可能性」『社会政策』11, pp.32-44

梅崎修・田口和雄（2012）「Regional Oral History Office（ROHO）のオーラルヒストリー・アーカイブについて」『生涯学習とキャリアデザイン』9, pp.75-85

――――・――――（2013）「コロンビア大学・CCOH（Columbia Center of Oral History）におけるオーラルヒストリー調査とアーカイブについて」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』10, pp.319-338

――― ・ ――― (2014)「MATRIX（The Center for Digital Humanities and Social Sciences at Michigan State University）におけるオーラルヒストリー・デジタル・アーカイブの試み」)『法政大学キャリアデザイン学部紀要』11, pp.279-296

――― (2014)「英国におけるオーラルヒストリー(1) ―フリーランスのオーラルヒストリアンたちとの出会い」『生涯学習とキャリアデザイン』第 12 号 No.1 pp.123-130

――― (2015a)「英国におけるオーラルヒストリー(2) ―収集・整理・公開の方法」『生涯学習とキャリアデザイン』第 12 号 No.2 pp.121-130

――― (2015b)「英国におけるオーラルヒストリー(3) ―Britain at Work：Voices from the Workplace 1945-1995 の活動」『生涯学習とキャリアデザイン』第 13 号 No.1 pp.135-143

――― (2016)「労働史オーラルヒストリー・アーカイブの試み―映像化の取り組みと資料の利用可能性を中心に―」『社会政策』掲載予定

酒井順子（2008）『市民のオーラル・ヒストリー―歴史を書く力を取り戻す』かわさき市民アカデミー出版部

田口和雄・梅崎修（2012）「アメリカにおけるオーラルヒストリー・アーカイブ化の現状について―UCLA Center for Oral History Rsearch（COHR）のインタビュー調査をもとに」『高千穂論叢』47(1) pp.99-119

――― ・ ――― (2013a)「NYU Tamiment Library & Robert F. Wagner Labor Archives におけるオーラルヒストリーのデジタル・アーカイブ化について」『高千穂論叢』47(4) pp.97-118

――― ・ ――― (2013b)「The New York Public Library for the Performing Arts and the Ellis Island Immigration Museum におけるオーラルヒストリー・プロジェクトについて」『高千穂学園創立 110 周年記念論文集Ⅰ』) pp.311-323

――― ・ ――― (2014)「WSU Walter P. Reuther Library and Urban Affairs におけるオーラルヒストリー・プロジェクトとアーカイブの現状について」『高千穂論叢、高千穂学園創立 110 周年記念論文集Ⅱ』48(3･4), pp.139-162

Paul Thompson（2000）The Voice of the Past: Oral History 3 rd. ed. Oxford（酒井順子訳(2002)『記憶から歴史へ―オーラル・ヒストリーの世界』青木書店)。

Oral history in the United Kingdom (4) －Centre for the Study of the Production of the Built Environment

UMEZAKI Osamu

This report introduces an oral history archive in the United Kingdom (UK), a country that is advanced in the study of oral history and in related research. I visited the Centre for the Study of the Production of the Built Environment in the UK that had oral history records pertaining to building workers' stories (Constructing post-war Britain: 1950-70).The staffs had knowledge on how to manage and exhibit oral documents. I interviewed a staff member of these archives and attended some exhibitions on oral history. This paper presents my report on my investigations. It is likely that this report will offer valuable information on ways of collecting, safekeeping, and exhibiting oral history, which will be useful for Japanese oral historians.